



Title	貴志雅之教授のご退職に際して
Author(s)	森, 瑞樹
Citation	大阪大学英米研究. 2021, 45, p. 111-115
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99462
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

貴志雅之教授のご退職に際して

森 瑞樹

いつの頃からだろうか、貴志先生はご自身のご退職を口にするようになっていた。もちろん今でも変わりはないが、澁刺とし、研究者としても露ほどの衰えを見せない貴志先生のお姿を目の前にすれば、当時はそれが遙か先の夢物語のように感じられたとしても仕方がないだろう。ただ、それからというもの私は、どれほど些細であろうと、いずれかの仕方ですの時に関われることを陰ながら願ってきた。そして刻々とその瞬間が迫り来るにつれ、いよいよ現実のものとして甘んじざるを得なくなってきたようだ。だからこそ、このエッセイのお話を頂いた際には嬉しくもあり、同時に寂しさが募るものでもあった。この拙文を綴りながら、改めてその意味をしみじみと考えてしまう。

そもそも、私が貴志先生と出会ったのはかれこれ20年ほど前に遡るだろうか。ゼミ説明会で、教え子なら誰でもわかってくれるであろう「あの目線」で、自信に満ち溢れ、愉しげにお話しする貴志先生の姿が今でも鮮明に思い出される。その一方で正直なところ、その時のお話しや、ゼミを選んだ理由ははっきりと思い出せない。ひとえに貴志先生の人としての魅力に引き込まれてしまったのだろう。そしてあろうことか、アメリカ演劇どころか文学自体になんの嗜みも持ち合わせていなかった私を貴志先生はご自身のゼミに受け入れてくれた。ある意味で、それが私にとって運命の分岐点だったのかもしれない。アルバイト先のイタリア料理店での仕事にやり甲斐を感じ、当時はそこに就職する未来を見据えていた私がいま、貴志先生と同じ大学教員としてアメリカ演劇研究の徒のひとりとなっているのだから。そしてなにより、私はアメリカ演劇を研究する大学教員を生業とし、充実した日々を過

ごすことができている。ひとりの人間の人生を大きく変えてしまうほどの魅力のある人物との出逢い。これほどの稀有な幸福に恵まれたことは、いったい誰に感謝すべきなのだろうか。

アメリカ演劇研の第一人者である指導教員としてはもちろん、なにより私にとって貴志先生は時には父親としてでもあり、そしてまことに僭越ながら、時には友人としてでもあった。またありがたいことに、BBQでご自宅にお招きいただいたときをはじめ、ご家族の皆さまにもほんとうに懇意にいただいた。研究指導は言わずもがな、毎週のように酌み交わした月日のなかで、貴志先生とどれほどの会話をかわし、どれほど多くの教えを乞うたのだろうか。そのひとつひとつが今の私の血肉となっていることだろう。ただ残念ながら、その全てをここで書き記すことはもちろん能わないし、そしてなおのこと、この心からの謝意は筆舌に尽くし難い。このような時、表現という命題に挑む芸術家たちに改めて敬意を払いたくなる。そこでアメリカ演劇研究者らしく、あるひとつの演劇作品の力を借り、衷心から尊敬する師との思い出を振り返り、感謝の言葉を紡いでみたい。

ジョン・ローガンによる『レッド』は、抽象表現主義の第一人者であるマーク・ロスコとそのアシスタントであるケンとが織りなす二人芝居である。開幕冒頭、ロスコのアトリエを初めて訪れたケンに対し、ロスコは自身の作品を見せ、そこから読み取れるものを問う。もちろん、一介の学生であるケンはその答えに窮してしまう。しかし、時を経るごとに、そのようなケンもロスコと共に過ごすことで、彼の理念を吸収し、遂には色彩の解釈で論を交わすようになってゆく。

先述のとおり、以前の私はいわゆる文学というものに触れたことは数えるほどしかなかった。だからこそ、文学作品が垣間見せてくれる世界やその可能性に意識的になることは皆無であったと断言できる。無知、無学とはほんとうに怖いもので、どちらかと言えば、文学というものに好意的な印象は持っていなかった。「フィクションなのだから。」心ではそう思ってもいたのだろう。当然のことながら、トニー・クシュナーの名作『エンジェルズ・イン

・アメリカ』を扱ったゼミでの初めての発表では、右も左もわからず、登場人物の心理描写をなぞっただけの愚論を晒してしまった。それを思い返すと今でも忸怩たる思いに駆られてしまう。もちろん、そのとき貴志先生はいつものように厳しく、同時に優しく的確な指導してくださった。その後も失敗を繰り返す凡庸な学生である私をみて、貴志先生はどのようなお思いでいらっしやっただろうか。その心根は窺い知ることはできないが、それでも貴志先生が決して指導の手を緩めることはなかったことへは感謝してもしきれない。そしてなにより、アメリカ演劇の政治学というテーマを研究者人生の中核に据え、それを真摯に追求なさる貴志先生のお姿を側で見ることで、「フィクションをとおして現実を見る」という文学研究の醍醐味に気付かされ、のめり込んでいった。世界の見方、すなわち文化・社会に臨む人としての責任の在り方を思弁する。それがアメリカ演劇研究の師である貴志先生から私が受け継ぐものになっていればと切に願っている。

さて、『レッド』最大の見せ場とともに、さらに追想してみたい。物語中盤、ロスコとケンの二人は息のあった動きで巨大なキャンパスに抽象画を描く。壮大なクラシック音楽に合わせ、舞台上で実際に絵画が描かれるこの迫力のあるシーンは、『レッド』のハイライトと呼ぶにふさわしい。

修士の院生になった頃からか、TA や RA として貴志先生の研究のお手伝いをするようになった。その際、確認作業として貴志先生の原稿を声に出して読むことが幾度となくあった。そのせいか、初見の貴志先生の原稿でも読みなく読めるようになっていくことはささやかな誇りである。

そして、いつの日か貴志先生と一緒になんらかの研究活動をしたい、残したいという願いが生まれ始めた。もちろんそれは、シンポジウムへの登壇や共著のことである。思い返すと、初めて貴志先生の研究活動に関われたのは写真だった。趣味程度で写真を楽しんでいたのだが、下呂温泉へ赴いたゼミ旅行のさいに撮ったディスクオルゴールの写真を、貴志先生に気に入っていただいた。そしてその写真を貴志先生の編著書『20 世紀アメリカ文学のポリティクス』のカバー写真として採用していただいたのである。研究室へ向

かうエレベーター内でこれを伝えられたときの高揚感は今も残っている。たとえ写真であっても、貴志先生のお仕事に携われたことが嬉しかった。

シンポジウムへの登壇や雑誌『アメリカ演劇』の論文もそうではあるのだが、真の意味で夢が叶ったと思えたのは、貴志先生の編著書『アメリカ文学における幸福の追求とその行方』で共著者のひとりとして名を連ねることができたときだろう。ありがたいことに、この編著書では装丁の全てを任せていただいた。だが、貴志先生の編著書に泥を塗らないようにという重圧に苛まれた執筆期間であったことは言うまでもない。だからこそ、実際に書物のかたちとして本を手にとったときの喜びはひとしおであった。

貴志先生の退職年度に出版された『アメリカ演劇、劇作家のポリティクス——他者との遭遇とその行方』。貴志先生の単著にして、アメリカ演劇研究者人生の集大成である。そしてまた幸運なことに、このご著書でも装丁の全てを担当させていただいた。時はコロナ禍。各大学がオンラインでの講義形式を採用し、慣れないコンテンツ作成に労を要していた時期である。今だから言えることとして、講義のコンテンツ作りを少々疎かにして、この装丁制作にのめり込んでしまった。それほど嬉しく、楽しかった。貴志先生の喜ぶ顔や、おそらく掛かってくるであろう電話越しの声を想像しながら試行錯誤を繰り返した日々を、今は愛おしく思う。

『レッド』最終場面において、ロスコはケンを解雇する。もちろんこれは悪意のあるものではなく、ケンを送り出すためのロスコなりの手荒いながらも、愛情に富んだ流儀である。

私はいま、大阪を離れ、遠い広島で大学教員として働いている。もちろん一人前になったとは言えるはずもない。貴志先生がそうであったように、ひとりの学生の人生に影響を与えることは、私にはまだできそうもない。ことあるごとに、貴志先生であればどうしたであろうか、ということが頭をよぎる。それでも、いつの日かそうなれることを願い、アメリカ演劇研究に邁進してゆくのだろう。貴志先生から受け継いだものを、次に繋げてゆくことの責務を感じてみいる。

本来なら、貴志先生のご退職に際し、そのご栄光やご業績を書き連ねるほうがふさわしかったのかもしれない。しかしそれでは、この20年ほどの貴志先生との関係が他人事のようになってしまうような気がした。だからこそ、私自身の思い出を綴ることで、謝意としたかった。もちろん、お話は伺っているけれども、私が出会う前の貴志先生、男として、夫として、父として、祖父としての貴志先生など、私が知らない貴志先生の一面も多分にあるだろう。また、気が置けない仲間内の諸先生方や、同窓の先輩や後輩から見た貴志先生の姿もあるだろう。だけれども、私にとっての貴志先生は、アメリカ演劇研究の師であると同時に、その魅力で私の人生を変えてくれた恩人であり、さらには人生の師であることに決して変わりはない。

ご自身のご退職のお話をされると、貴志先生といつもその後の人生について面白おかしく語らいあった。そのときのお話に上がった候補のなかで、実現するものはあるだろうか。楽しみだ。貴志先生の大阪大学大学院教授としての人生は2021年3月末を持って区切りを迎えることとなる。しかしながら、それからの新しい人生でもきっと変わらずに真摯に過ごされてゆくのであろう。そしてこれからも、師弟関係は変わることなく、いつまでも語り合い、影響をもらい続けていきたい。やはり最後はこの単純な言葉に立ち戻ってしまう。これまで誠にありがとうございました。そしてこれからも何卒よろしくお願い申し上げます。